

し、その添加量と脱色との関係を種々の pH で実験し、pH の影響についてしらべた。

まず、試料アミノ酸液に、炭酸ソーダを加えて中和した時の吸光度の変化をしらべたが、pH 4 附近の時に色が最もすくなかった。これは色素がこの pH の時に最も難溶性であることを示している。つぎに pH 0.5~8.3 の範囲のアミノ酸液に骨炭を加えて脱色を行った。どの pH でも骨炭の添加量が相当多い場合には大体同じ位の色にまで脱色された。しかし、脱色作用は pH の低い時の方が一般に良好であった。また、窒素の定量を行った結果、骨炭を用いて脱色した時に窒素はあまり減少しなかった。

以上の結果から、非常に色の濃いアミノ酸液の脱色には pH 4 附近に中和してから、骨炭を用いて脱色すると良好な結果をうることを知った。

52 淡口の醤油の製造に関する研究

姫路短大 糟谷 利津
○藤井 小鈴

グルタミン酸を分離した分解アミノ酸液の脱色についてはすでに報告したが、脱色剤として活性炭、骨炭、および酸性白土を用いて実験を行ったところ、活性炭の場合には、脱色効率が良いが同時に窒素の減少率も大きい。また酸性白土の場合には、窒素の減少率は少いが脱色効率も小さい。しかし、脱色剤として骨炭を使用した場合には、脱色効率も比較的大きく、窒素の減少率も小さいので骨炭の使用が最も有利である事を知った。そこで、今回、本報では主として、骨炭を脱色剤として使用